

郭店楚簡『老子』と「老子」の祖型

小池 一郎

緒論

司馬遷の『史記・老子伝』によれば、楚国苦県の人老子は「上下から成る書」を著し、「道徳の意五千言」を述べた。戦国時代の初〜中期（前四〇〇年前後）の頃の人かと推測される。かねて最古のテキストは伝わらず、人々はごく最近に至るまで、後漢以降に編纂された河上公本、王弼本などの注釈付きテキスト、すなわち「老子道徳経」を、さらにその宋代以降に翻刻された刊本によつて読まざるを得なかつた。断片的には戦国諸子の著作の中に引用された箇所も有るが、それもやはり宋代以降の刊本に頼るしかない。この『老子道徳経』五千余言をめぐつては、その文章の晦渋さ故に、古来多くの注釈が著され、様々な論議が戦わされてきた。

ところが、一九七三年に湖南省長沙の馬王堆漢墓より帛書『老子』が出土するに及び、我々二十世紀の人間は、前二〇〇年前後に書かれたテキストを、写真版により現物の姿のままに読むことが可能となつた。これは、専門の研究者はもとより、数多くの「老子」の愛読者にとつても、驚くべき慶事であつた。

帛書『老子』は帛に書かれた写本で、甲・乙の二本が出土した。甲本は前二〇六年、前一九五年、乙本は前一九四年、前一八〇年の間の筆写と推定されている。⁽²⁾ 内容は基本的には現行諸本に一致しており、総字数も乙本で五四六七字で、現行諸本より若干多い程度であるが、現行本で八十一章ある各章の順序においては、幾つかの相異がある。大きな相異は、甲乙本ともに、「道経」・「徳経」の順序が逆になり、「徳」・「道」の順に並んでいることである。その他、各章の配列にも数箇所現行本と違う所がある。文字の異同、脱落、追加等も少なくはない。しかしなお、帛書甲乙本は基本的には現行諸本の枠組みをはずれてはならず、帛書が現行諸本の先行テキスト（少なくともその一系統）であることは確実である。私はかつてこの新発見の帛書甲乙本に基づいて、論文「帛書老子文体考」(『中国文学報』第二十九冊、京都大学文学部中国文学会、一九七八年)を世に問うたことがある。

そして、『帛書老子』の出土からちょうど二十年後、今度は湖北省荊門郭店けいもんかくてんの楚墓中より、大量の楚国の字体で記された竹簡が発見され、その中に「老子」の竹簡が多数含まれていた。その保存状態は極めて良好であり、我々は写真版によってその鮮明な字体を目の当たりにすることができる。楚簡『老子』は三本に分かれ、それぞれ竹簡の長さが異なる。この三本を以下、崔仁义著『荊門郭店楚簡《老子》研究』(科学出版社、北京、一九九八年十月)に従って、A・B・C本と呼ぶことにする。楚簡『老子』三本は、その内容が完全に帛書『老子』及び現行本『老子』に対応する。重複は一箇所のみである。ただし、楚簡『老子』の段落の分け方、配列の仕方は帛書・現行の諸テキストとはほとんど無関係の様に見える。「道経」と「徳経」の区別もなく、両者は入り交じっている。また、細部の釈文(文字の読み方の確定)については、二〇一一年、中国、台湾で次々と研究成果が公刊され始めているもの、⁽⁴⁾ まだ諸説紛々の状態である。さらに、文字の確定とともに重要な困難な課題は、楚簡『老子』三本の性格を見きわめることであるが、今のところ、C本の筆写時期が最も古く、続いてB

本、A本の順に書かれたであろうこと以外は、何も明らかにされていない。饒宗頤氏が、

而老子則僅注重校勘方法、零星意見、未受到深入措意、至於全面整理、更談不到。(魏啓鵬著『楚簡《老子》』東釋『饒序』)

と指摘する状態がいまなお続いている。また、楚簡『老子』が帛書『老子』とどういう関係にあるのかも重要な問題であるが、余りにも編次の相異が大きいがために、仮説を立てることさえ難しい。

いずれにせよ、今回出土した楚簡『老子』は、合計で一八七〇字程度、重複した部分を省くと、一七九〇字余りであり、例えば、帛書乙本五四六七字の三分の一弱にしかすぎない。楚簡『老子』が帛書『老子』へと如何に増殖したのか。あるいはまた、今回発見の三本以外にも楚簡『老子』が存在したのか。そもそも三本は「老子」原本にどれだけ近いテキストなのか。疑問は次から次へと湧いてくる。Paulus Huang氏の、

“..... they must have an earlier common source from which they come.”

という推定も根拠無しとはしないであろう。本稿において、現段階で可能な限り、楚簡『老子』の本質に迫り、そしてまた楚簡『老子』と帛書『老子』の関係を明らかにしたいと思う。

第一章 楚簡『老子』三本の出土状況とその性格

ここで私は具体的、詳細な出土状況を述べるつもりはない。前掲・崔仁義著『荆门郭店楚簡《老子》研究』に依拠しつつ、以下の論を進めるに当たって必要なことのみを記すに止める。

一九九三年三月、湖北省荆門市郭店一号楚墓から、他の埋葬品とともに、大量の先秦典籍の竹簡が出土した。その中に、『老子』の竹簡三本が混じっていた。『老子』A本は長さ二六・三センチ、幅〇・五センチで、毎簡二十一〜二十三字が書か

れている。B本は長さ三十・五センチ、幅〇・六センチ、毎簡十九〜二十六字、そしてC本は長さ三十一・三三センチ、幅〇・五センチ、毎簡二十六〜三十二字、ABC三本ともに一冊になっており、各冊は更に数組に分かれるが、各本とも組の元の順序は不明になってしまっている。⁽⁸⁾『老子』A本は竹簡二十八枚、全約六百十字で、七組に分かれる。ただし、七組の中三組は「老子」以外の文章なので、本稿の直接の対象とはしない。A本の中、「老子」に属するのは四組、約二百九十字である。B本は竹簡十八枚、全約四百十字で、三組に分かれる。C本は竹簡四十枚、全約千七百十字で、六組に分かれる。荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』他の釈文は全てC本(甲本)を五組とするが、私は、崔仁义氏に従い、六組と考える。この点については、後で詳しく触れよう。竹簡の文章中には、段落を区切る記号「」や、繰り返し記号「」⁽⁹⁾、それ他有る。これらについても、後に必要に応じて触れることにする。三本とも、「老子」「道経」「徳経」といった文字は見あたらず、「第一章」などの章名も一切記されていない。

楚簡『老子』は何時書かれたのか。崔仁义氏が明解で、説得力のある説を出されているので、ここで紹介しておこう。私自身も今のところ、氏の説に従いたいと思う。楚簡『老子』は、楚簡の字体の発展過程からみると、「包山楚簡」より晚い。従って、楚簡『老子』の筆写推定時期は、包山二号墓の下葬年代(前三二六年)よりも晚いことになる。⁽⁹⁾一方、荊門の地域史と『史記』の記載を対照してみても、郭店楚墓の墓主の入葬年代は、秦の將軍白起が楚の都・郢を陥落させた時期(前二七八年、頃襄王三二年)よりも早いと考えられる。郭店楚墓はこの都・郢の墓域内に位置したのである。これらのことから、楚簡『老子』の筆写年代の上限は前三二六年、下限は前二七八年と推定される。おおざっぱに言って、前三〇〇年前後、帛書『老子』の筆写時期よりも約一〇〇年古いことになる。墓主が誰かは不明であるが、その身分は大夫級に達するであろう。一家に偏らず多くの典籍を収集していること、また、「東宮の杯」が出土していることから、「太子の師」であった可能性が

〔図1〕楚簡老子・帛書老子対照表

帛書1 道経	20	B 2 - 3	帛書38 徳経	60
2	21		39	61
3	24	C 3 - 3	41	62
4	22		40	63
5	23	C 1 - 2	42	64
6	25	C 1 - 1	43	C 4 - 1 C 5 - 6
7	26		44	A 7
8	27		45	65
9	28	C 6 - 4	46	66
10	29		47	C 5 - 2
11	30	C 5 - 4	48	80
12	31	A 6	49	81
13	32	C 3 - 4	50	67
14	33		51	68
15	34	C 5 - 5	52	69
16	35	C 2	53	70
17	36	A 4 - 1	54	71
18	37	A 4 - 2	55	72
19		C 5 - 1	56	73
			57	74
			58	75
			59	76
				77
				78
				79

ある。楚簡『老子』は、楚国の重要典籍の一であったことに間違いはない。後漢・王充の「論衡」量知篇に「二尺四寸、聖人之語」とある。これは、推算五四・五十五・四センチに当たる。竹簡の長さから判断して、楚簡『老子』はそれに次ぐ重要文献として、C・B・A本の順に重視されたと考えてよいであろう。(以上、崔氏前掲書九頁～一六頁)

次に、楚簡『老子』三本と帛書『老子』の章との対比をしておこう(図1参照)。

図中、左に現行本の章番号を用いて帛書の章次(甲乙本同じ。現行諸本とは若干の異同がある)を記し、右に、それに対応する楚簡ABC本の組数(崔仁义氏の区分に従う。組数は可変)と各組内での段落(基本的に現行本の章分けに一致)の順序(これは固定のもの)を示す。例えば、C33とあれば、楚簡『老子』C本の第三組第三段落を指す。「徳経」四五章、六四章は楚簡では二つの段落に分けられる。また、六四章後半のC56とA7(全二段落)は唯一の重複箇所である。楚簡『老子』は、帛書『老子』全八十一章中の三十一章に分散している。

ここで各本の分布状況を検討してみよう。C本は帛書の「徳」経、「道」経の双方に均等に分布している。これに対して、B本は「道」経にも少し入っているが、大部分が「徳」経に集中しているのが認められる。A本は分量自体がそれほど多くはないが、「道」経に偏在している。次に、唯一の重複箇所である現行本第六十四章後半のC56とA7との対比を通して、A・C本の時間的前後関係を吟味してみよう。まずC56の全文を挙げる。テキストは基本的に崔仁义氏前掲書に依り、手を加える時は注記する。文字は釈文に従って、できるだけ現行の漢字に置き換えて記す。(テキストの引用については以下同)

為之者敗之、執之者遠之、是以聖人亡為、故亡敗、亡執、故亡失、臨事之紀、慎終如始、此亡敗事矣、聖人谷(欲)不谷(欲)、不貴難得之賞、季(教)不季(教)、復衆之所過、是故聖人能輔万物之自然而弗敢為、(C56 七十一字)

線で囲んだ**敗為**は、テキストが判読できず、他本で文字を補った部分である（以下同）。次にA7を同様に示す。

為之者敗之、執之者失之、聖人無為、故無敗也、無執、故無失、慎終若始、則無敗事矣、人之敗也、恒於其且成也敗之、是以**聖**人欲不欲、不貴難得之貨、学**不学**、**復**衆之所過、是以能輔万物之自然而弗敢為、（A7 七十八字）

最後に、帛書甲乙本による筆者自身の校定本とその訳を示そう。⁽¹⁰⁾

為者敗之、執者失之、是以聖人無為也、**故無敗也**、無執、故無失也、民之從事也、恒於其成事而敗之、故**（曰）**慎終若始、則無敗事矣、是以聖人欲不欲、而不貴難得之貨、学不学、而復衆人之所過、能輔万物之自然而弗敢為、⁽¹¹⁾

（第六十四章後半 八十四字）

（働きかける者はぶち壊し、執着する者は取り逃がす。それで聖人は働きかけないのである。だからぶち壊すことがない。執着しない。だから取り逃がすことがない。民衆が仕事をする場合、それを完成する間にぶち壊すのが恒である。だから「終わりに臨んでも始めと同じように慎重にすれば、仕事を失敗することがない」という。それで聖人は、欲望に囚われないことを望み、得難い財貨を貴ばない。学問の無用さを学んで、多くの人々の行き過ぎた所を元に戻す。万物が本来の姿になるのを助けることはできるが、自ら進んで働きかけようとはしない。）

右引用例において、C本の「亡為」からA本の「無為」へ、C本の「谷不谷」からA本の「欲不欲」へ、C本の「孝不孝」からA本の「学不学」への変化を見ると、C本がA本よりも古く、その逆では決してあり得ないことが分かる。また、C本の「臨事之紀」という簡潔な表現がA本では消えて、その代わりに「人之敗也、恒於其且成也敗之」といういかにも注釈的な言葉が入っている。

次に、A本と帛書を比較するに、「無為」「若始」「欲不欲」「学不学」などの表現の一致は両者の親近性を語っている。た

だし、A本の「為之者敗之、執之者失之」「復衆之所過」などはA本がC本の面影を残している部分である。A本はC本と帛書の中間的な位置を占めるものと考えられる。更に注目すべきは、「是以」や「也」といった助字がA本・帛書で増加していることである。「也」に絞って調べるに、C本は用例ゼロ、A本は3、帛書は5（一部推定を含む）であり、この点でもA本は中間の位置にある。

さて、もう一つ、A本の「人之敗也、恒於其且成也敗之」は、帛書では「民之從事也、恒於其成事而敗之」となっていて、これは明らかに帛書がA本を襲っている。ただし、帛書では「其且成」の「且」(まさニ・セントス)を落したが為に、意味するところが不明瞭になった。(現行諸本は「且」の代わりに「幾」(ほとんど)を入れている)

以上まとめれば、少なくとも六十四章後半にあつては、楚簡C本↓楚簡A本↓帛書というテキストの時間的方向性が確認される。なおまた、ここでC本の「臨事之紀」に戻れば、「臨事」の語は『論語・述而篇』の「必也臨事而懼、好謀而成者也」という孔子の言葉の中に見えている。C本「臨事」の主体は明らかに「聖人」であるのに対して、A本で「臨事之紀」に代わって挿入された部分では、主体は「人」と一般化され、これが更に帛書では「民」という被統治者に変化している。このような各本間における主体の移行・移動ということについても、十分な注意を払うべきであろう。

楚簡B本についても二例を挙げて検討しておこう。まずB3-1の例。現行本第五十二章の中間部分である。

闕其門、塞其兌、終身不贅、啓其兌、塞其事、終身不迷、

(B3-1)

次にこれに続くB3-2を挙げる。こちらは現行本第四十五章前半である。

大成若缺、其用不弊、大盈若盅、其用不窮、大巧若拙、大成若詘、大直若屈、

(B3-2)

字釈を加える。「闕」は「説文」に「閉門也」、「兌」は「穴」の意で、「目耳鼻口」を指す。「贅」は「広韻」に「丘前高後

下、通作旄」とあり、「衰える」意か。「迷」は「勅」に通じ、「説文」に「勑、勞也、亦作迷」とある。文中では「勞たうわれる」と受け身に読むべきであろう。次に帛書『老子』の当該部分を挙げよう。

塞其兌、閉其門、終身不動、啓其兌、濟其事、終身不救、
(第五十二章)

大成若缺、其用不弊、大盈若沖、其用不寤、大直如詘、大巧如拙、大贏如絀、
(第四十五章)⁽¹²⁾

第五十二章と第四十五章は本来繋がっており、内容的にも連続していたことが分かる。どちらも「徳」經に属し、「道」を体得すれば、その徳によって身体がいつまでも安全であることを主張している。文字については、楚簡の方が、帛書と比較して、「勤」↓「兌」、「濟」↓「塞」、「救」↓「啓」のように、意味がより具体的であり、身体に関係のある語を用いている点に特徴がある。また、両段落とも末尾に段落区切りのマークを持ち、楚簡『老子』の段落分けが、必ずしも現行本の章分けと一致しないことを示している。B本については、C本と関連つけて、後にさらに論じたい。

第二章 楚簡『老子』C本の言語的特性

楚簡『老子』の中で最も古層と考えられるC本について、ここで更に深く考えてみよう。まずC2(現行本十六章前半)の組は段落が一つしかない()から始めよう。

至虚、恒也、守中、篤也、万物方作、居以須復也、天道員員、各復其根、
(C2)

帛書校本本では、次のようになる。

至虚、極也、守静、篤也、万物並作、吾以觀其復也、夫物芸芸、各復歸於其根、
(第十六章前半)

(虚を十分に招き、静を篤く守る。万物が並び起り、私はそれらが戻って行くのを觀察する。それらの物は盛んにつこめき、それぞ

れの根源に復帰してゆく。()

両本は基本的によく一致していると言つてよいであらう。すなわち、C本から帛書へとテキストが移行した。しかしながら、仔細に検討してみると、両者には見過ごすことのできない相異が存在することが分かる。それらの一つ一つについて、検討してゆこう。先ず両者の相異点を列挙してみる。

楚簡C本

帛書校定本

- (1) 「至虚、恒也」 ↓ 「至虚、極也」
- (2) 「守中、篤也」 ↓ 「守静、篤也」
- (3) 「居以須復也」 ↓ 「吾以觀其復也」
- (4) 「天道員員」 ↓ 「夫物芸芸」
- (5) 「各復其根」 ↓ 「各復歸於其根」

(1)は「恒」は神秘主義的修行の持続性をいうが、「極」は単に程度をいうにすぎない。C本の言語では、「恒」が他の箇所でも神秘主義的な意味を持つ。例えば、C3-1に「能為道、恒亡為也」(三十七章)、またC3-4に「道恒亡名」(三十二章)。やはりここは、「極」ではなくて、「恒」でなくてはならない。(2)の「守中」も神秘主義的修行における、具体的な身体修練をいうであらう。元は「静」といった静止状態を言ったのではなくて、おそらく、C4-2(五十六章)の「閉其兌、塞其門」と関連する言葉であらう。(3)はとりわけ両本で大きな違いがある。C本では、「居り続けて、万物の復るのを須つ」のである。これに対して、帛書では、「居」が字体の混同に起因するのであるうか、「吾」に変わってしまった。それに従つてというべきか、「須復」が「觀其復」に変化している。「吾」が入ったことにより、先行する「万物」の影が薄れたので、再

度「其」で指示しなおす必要が生じたのであろう。また、「吾」という一人称の代名詞を受ける動詞として「須[※]つ」では余りにも受動的であるが故に、おそらく「觀」という主体的な能動動詞が取って代わったのであろう。楚簡C2では、未だ一人称意識の兆さぬ段階だったのである。

次に、(4)の「天道員員」から「夫物芸芸」への変化については、楚簡では「天道」が主体であるのに対して、帛書では「物」が主体的に動くということである。最後の(5)「復歸」という熟語化した連動詞は、楚簡『老子』では見られないものであり、ここにも楚簡と帛書で用いられている言語の差異を窺つことができる。

右引用文に見えていた「万物」と近い概念の語に「民」がある。「民」は楚簡『老子』中に全一五例を見るが、この「民」はC本にしか見えない。C本の中でも、四組に六例、五組に八例と極めて集中した現れ方をしている。その中から二例を挙げる。

民莫之命、而自均焉、

(C34)

我亡為、而民自化、

(C43)

上に立つ者が何もなくても、「民」は自発的に身を律するのである。「民」との関連でC本で注目されるのが、「弗」である。「弗」については、私は前論文「帛書老子文体考」(以下「前論文」と略す)で「意志を伴った否定の語」と定義した(一五頁)。その考えは今も訂正する必要を認めない。さて、「弗」は楚簡『老子』中、全部で二〇例が見られ、その分布は、

A本…2例 B本…0例 C本…18例

である。やはりC本に集中している。C本の内訳は次の通りである。

C3組…6例 C4組…2例 C5組…7例 C6組…3例

C3組とC5組に比重がかかっているのが認められる。この二組から例を引いてみよう。

聖人居亡為之事、……為而弗恃也、成而弗居、夫唯弗居也、是以弗去也、
(C33)

右文の「弗」は、「亡為」に由来する「聖人」の否定意志を示す。

其(聖人)在民上也、民弗厚也、其在民前也、民弗害也、天下楽進而弗厭、
(C52)

こちらは、「民」の受動的な否定意志である。ただし、五組には道の体得者の否定意志を言うものもある。

「民」「聖人」と扱った関連で、次に「侯王」について見てみよう。「侯王」は楚簡ではC本に二例が見えるだけである。しかし、この二例の「侯王」は重い意味を持つ。

能為道、恒亡為也、侯王能守之、而万物将自化、化而欲作、将鎮之以亡名之樸、夫亦将知足、知足以束(静)、万物将
自定、
(C31 三十七章)

「束」は、崔氏は「刺」、劉信芳氏は「諛」を当てる。なお、「知足、知足」の部分、竹簡では「知_二足_一」となっているが、「足」の繰り返し記号「_二」が脱落しているものとして処理した。

道恒亡名、僕(樸)唯妻(小)、天地弗敢臣、侯王如能守之、万物将自賈、……夫亦将知止、知止所以不殆、

(C34 三十二章)

次に、右二例に相当する帛書校定本を引く。

道恒無名、侯王若能守之、万物将自化、化而欲作、吾将鎮之以無名之樸、鎮之以無名之樸、夫将不辱、不辱以静、天地
将自正、
(三十七章)

道恒無名、樸雖小、而天下弗敢臣、侯王若能守之、万物将自賈、……夫亦将知止、知止所以不殆、
(三十二章)¹³⁾

私は、前論文で、三十七・三十二章に共通する、次の三つの文体の特徴を指摘した。一、「道恒無名」、「侯王若能守之」、「万物將自〇」、「天地」の表現を含む。二、「樸」を「道」の比喩として用いる。三、散文体である。楚簡C本にもこの文体の特徴を当てはめることができる。ただし、若干の調整が必要である。「道恒無名」は「道恒無〇」に改め、「天地」は共通項からはずさなければならぬ。逆に、「知足」、「知止」が共通項になる。楚簡では、三十七章相当部が先行し、三十二章相当部はそれを受ける形で書かれていると考えるべきであろう。C33の「能為道、恒亡為也」はそのことを如実に語っている。C34の「道恒亡名」は当然「道、亡為也」と「以亡名之樸」を受けている。

ここで、本筋からは離れるが、C33はC56（本稿二九六頁既出）の後には接続しないことを論証したい。荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年）に始まって、先に挙げた崔仁义氏以外の釈文は、全てC56のすぐ後にC33を接続させ、その結果、そこに組の分断を認めていない。（したがってC本の組数が一つ少なくなる）私は、これは認め難い誤りだと考える。その理由を次に記そう。

1. 「万物之自然而弗能為、道恒亡為也」の結びつきは不自然である。楚簡『老子』のみならず、帛書『老子』においても、「弗能」という結合は一例も見当たらない。（楚簡『唐虞之道』には「弗能」の用例があるが、これは「老子」とは全く別系統のテキストである）C56と重複する楚簡A7および帛書でも「弗敢為」であり、現行『老子』諸本もすべて「不敢為」となっていて、「能」を使った例を見ない。『韓非子・喻老篇』引にも「恃万物之自然而不敢為」とある。それに反して、「能為」の言い方は、「能為百谷下」（C52）のように楚簡『老子』の中に用例を見出すことができる。従って、崔仁义氏が範を示したように、ここは「万物之自然而弗」で一旦切り、その後は竹簡が一枚散逸したと取り（すなわちここで五組が終わる）、「能為道」は当該の竹簡の冒頭から筆記されているので、新しい組（三組）の始まりと取るのが、唯一の合理的な文献処理

方法であると、私は考える。

2. 他の各組の長さと対照してみても、五組と三組が連続した一つの組だとすると、この組のみが極端に長くなり、全体の均衡を破ってしまう。

さて、もう一度拙論の本筋に戻って、ここで見落とせないのは、帛書『老子』三十七章で、「吾」が顔を見せていることである。楚簡の方には、これは見えていなかった。「道」の体得者としての「吾」。しかし、それではなぜ、「能為道（者）」としての「侯王」が設定され、提起されたのか。いささか、おせっかいな一人称「吾」ではないであろうか。

ここで、「侯王」と「聖人」の関連性についての考察に移ろう。「侯王」は右に述べたように、C三組に二度出て来るのみであるが、「聖人」は楚簡『老子』中に八回出てくる。

A : 1例 B : 0例 C : 7例

この内、Aの一例はA7であり、C5・6に重複する。C本中の分布は、

3組 : 2例 4組 : 1例 5組 : 4例

で、相対的にみて、やはり3組と5組に多い。C本3組全四段落のなかでは「侯王」と「聖人」は「侯王」↓「聖人」↓「聖人」↓「侯王」の順で出て来ていて、「侯王」に触発されて、「聖人」の概念が導入されたことを示しているように思われる。そして、「侯王」は「道」と結びつくのに対して、「聖人」は、少なくともC本3組にあつては、直接「道」には結びつかない。C本5組の4例の「聖人」ではどうであろうか。一例を取り上げて検討してみよう。

聖人之在民前也、以身後之、其在民上也、以言下之、其在民上也、民弗厚也、其在民前也、其在民弗害也、

合わせて、帛書校定本も引く。

是以聖人之欲上民也、必以其言下之、其欲先民也、必以其身後之、故居前而民弗害也、居上而民弗重也、⁽¹⁴⁾

帛書の二カ所の欲（傍線部）が、楚簡では見当たらないのが注目される。C5-2では、聖人は民の前にいる時にはむしろ自ら身を引くのである。民に先んじようとして、その目的のために一時的に身を引くのではない。このような「聖人」であつてこそ、「民」の否定意志「弗」が生じ来たることも可能なのである。帛書では、「欲」が入ることによって、本来の意図が歪められてしまっている。

ここでもう一度、C本の全体を見通して、その言語的な特性について考えてみよう。C本の言語は、リズムが四言の場合が多く、その語り口はゴツゴツしていて、むしろ詩的でさえある（例えば、C2の表現を見られよ）。内容的にも、より本質的なことのみを語り、表現は簡潔である。次にC3-2（六十三章）の例を引く。

為亡為、事亡事、味亡味、大小之、多易必多難、是以聖人猶難之、故終亡難、⁽¹⁵⁾

同じ箇所帛書校定本を引く。

為無為、事無事、味無味、大小多少、報怨以德、凶難於其易、為大於其細也、天下之難、作於易、天下之大、作於細、

是以聖人終不為大、故能成其大、夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人猶難之、故終於無難、⁽¹⁵⁾

帛書傍線部が楚簡に有る部分である。帛書に比してC本にはいわゆる説教調がほとんどなく、むだな繰り返しも見られない。帛書の「大小多少」という言い方がやや饒舌であるのに対して、C本の「大小之」は簡潔で、過不足のない表現である。

第三章 文体分析を通して見た楚簡『老子』の成立事情

本稿の緒論で述べたように、私はかつて帛書校本本『老子』の文体分析を行った。その分析の結果を、楚簡『老子』A B C本に適用すれば、いかなる結果が導き出されるか。本章では、この主旨に沿った文体分析と、分析結果の読み取り作業を行う。

その前に、私が帛書『老子』に基づいて行った文体分析の結果を、もっとも重要かつ不可欠な点にしばって紹介しておく。詳しくは、拙論「帛書老子文体考」を、ご覧いただきたい。帛書『老子』の文体の核には神秘思想に彩られた文体A₀が来からA₁・A₂・A₃の三小文体が派生した。A₁は神秘思想の形而上的展開、A₂は「道」の比喩的表現、A₃は「二の否定」という形での神秘思想の展開の文体である。以上の諸文体の総体を文体A層と呼ぼう。このA層から、やがて「聖人の無為」を説く文体B層が生まれてくる。ただし、B層は多様な形態を取る。まず、A層のA₀からA₃への流れの延長線上に、「聖人の無為」を説く文体B₀が生み出される。B₀は聖人の否定意志の強弱によって、さらに前期・中期・後期に分かたれる。一方、それとは別系統で、A層から直接「知の反省」の文体(B)が派生し、続いて(B)とB₀中期が結合する形で、「反智」の文体B₃が生まれる。⁽¹⁶⁾他方、文体B₀の最終局面(後期)からは、「聖人」の名が消えた、より受動的な姿勢の文体B₁、B₂、B₃が生じる。B₁は「知足」、B₂は「長生保身」、B₃は「天道」の文体である。A層は必ずしも完全にB層に流れ込んだのではない。B層の下には、伏流D層の存在が認められる。D層では「道」の体得者(神秘体験の経験者)の、「聖人の無為」として昇華しきれなかった暗い情念が渦巻いている。D層では当然「聖人」は現われず、「吾(我)」が姿をあらわす。D層は

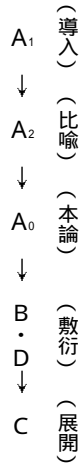
二つの文体に区分される。一つは「独白」の文体D₁で、ここでは、神秘体験者の孤独と現実における絶望が表白される。もう一つは、「負の観念」をもつばら唱える文体D₂である。A層の「二の否定」の文体A₃から「聖人の無為」B₀へ向かう過程で、「一の実現」が強調されてゆくが、D₂は二のうちの負の観念(剛に対する柔、雄に対する雌、動に対する静など)のみを受容する。現実においては、おそらく弱者であり、下位に在ったであろう「道の体得者」は、聖人という理想者を創出する裏で、独白として、負の観念の主張として、隠微に己を語っている。

さて、A層はB層とD層に分流した後、文体C層において再び合流する。その時、A層はもとのままの姿ではなく、より高い次元で再統一された。C層も多様な姿を見せる。C_i「善人」の文体は、「道」を「善人」という言葉を軸に解説し、C_{ii}「愛身」は、「自身を大切にすること」を説き、C_{iii}「兵家言」は、B₀「聖人の無為」とD₂「負の観念」の結合された所、あるいはその延長上に来る。C_{iv}「非戦」は、「道」を平和に結びつけ、非戦を主張する。C_v「兵家言」と近い関係にある。以下、C_v「死生」、C_{vi}「批判」、C_{vii}「ユートピア」などの文体が認められる。C層は、情が強く出、より民衆の立場に近く、それぞれが一個の散文体を形成しつつある。

以上のような文体分析を行った後、実際に帛書に当たり直して見て、私は、「徳」経と「道」経で文体上明らかな相異のあることに気がついた。各章の文体の比率を図に示そう。(0.5は一章が二文体に分かれるもの)

	(文体)			
	A	B	D	C
徳経	4	16.5	10.5	13
道経	14.5	11.5	1	10

徳経は文体BDCに布陣し、道経はABCに布陣している。帛書の全体を見渡すと、道経ではおおよそ、



の順をとり、徳経ではやや不明確であるが、およそ D ↓ B・C ↓ D の順に位置する。これらの意図的と思われる配列は、編纂者の存在を強く感じさせるが、それが老子自身であるかどうか、前論文で用いた私の方法では、明らかにし得なかった。

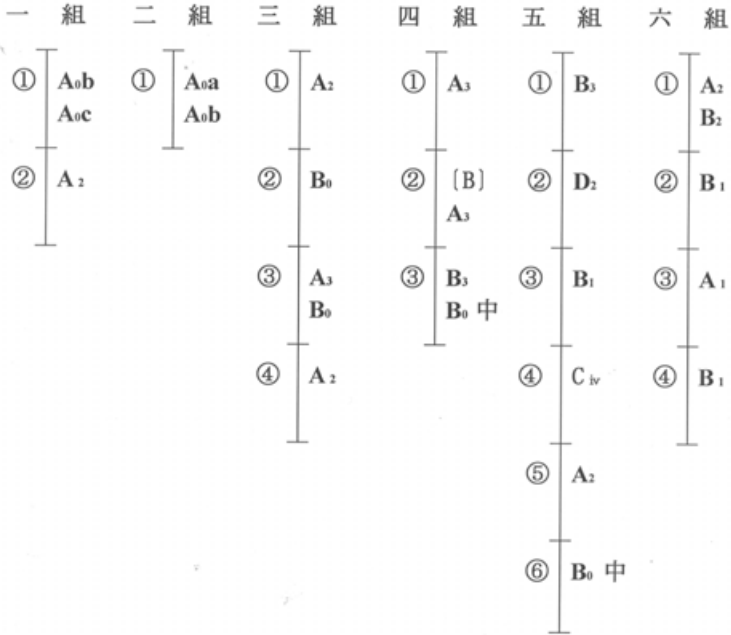
今回、私は、この帛書『老子』の文体分析法を楚簡『老子』に適用するに当たって、とくに何らかの不都合や方法の修正の必要性を感じなかった。ただ、帛書(すなわち現行諸本)の章分け・章次と、楚簡『老子』の段落区分・段落順序とは必ずしも一致していないので、一章をさらに細かく分割したり、或いは、他の章と合わせて一段落・一文体として処理したり、といった若干の手直しは行っている。そして、楚簡ABC各本の組毎、段落毎の文体確定を行ってみたところ、非常に興味深い結果を得ることができた。それを、まず表示してみよう。なお、もう一度確認しておく、ABC各本はそれぞれ独立して冊をなしており、それぞれが数組に分かれる(拙論では各本の組番号は崔仁义氏による)。組の配列は現在では不明になっているが、一つの組内部の段落順は固定のものである。まず、一番古い筆写と考えられるC本から始めよう(図2・A表参照)。

この図2・A表で、相互の文体の層が並行するように各組の位置を前後にずらしてみると、次の図2・B表のようになる。ここで、より高い整合性を得るために、私の判断で一組と二組の順序を入れ換えてみた。(図2・B表参照)

B表では、組と組の繋ぎとなる文体(図の"で結んだ部分)が存在することが分かる。また、C本の六つの組は、全体として一定の方向性を持つことが明らかである。そして、その方向性は、私の考える文体の発展方向に、ほぼ完全に重なる。

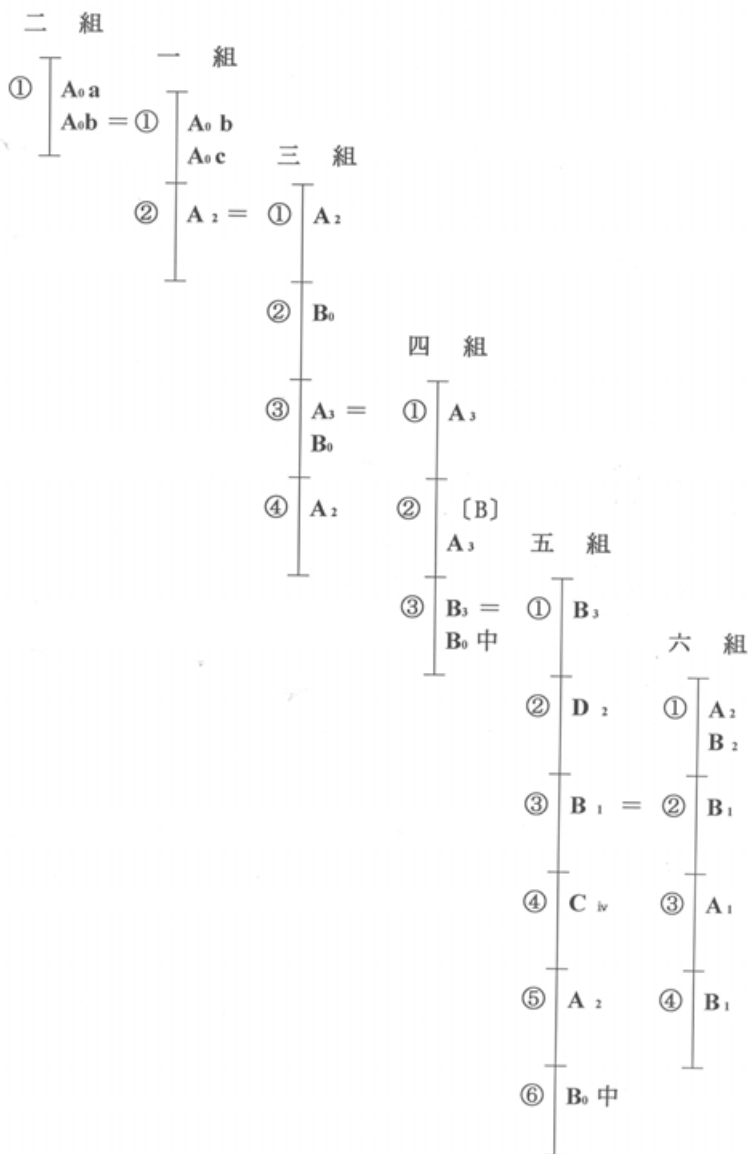
〔図2〕C本の文体分析

A 表



〔 図 2 〕 C 本の文体分析

B 表



(それにつけても、この順序は崔仁义氏の組順にほぼ一致する。氏の組順決定の方法がいかなるものであったか、私は詳らかにしないが、改めて氏の判断の正確さに敬服する次第である) このB表が指し示しているものに、本稿の第一、二章で私が述べてきたことを合わせて、それを文字に書き改めれば、次のようになるであろう。

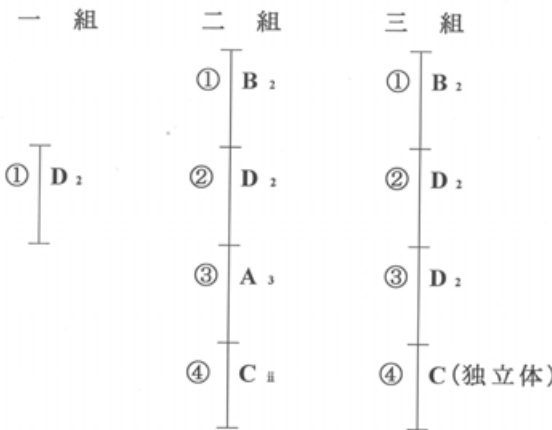
一組 神秘体験(修行・体験) ↓ 二組 神秘体験(体験・定義・比喻) ↓ 三組 神秘思想(比喻・二の否定)・侯王と聖人の出現(聖人の無為) ↓ 四組 二の否定・知の反省・反智 ↓ 五組 反智・負の觀念・知足・外縁部(非戦)・比喻・聖人・民の否定意志 ↓ 六組 比喻・長生保身・知足・形而上学・知足(B層周縁部の形成)

以上のような様々な分析結果のうち、C本の主軸は文体Aから文体Bへ、同時にまた各層の核心より周縁に向かつて動き、五組の段階で、D層とC層が始めて顔を出したことが、特に注目される。そして、C本はここまででその文体の発展を止めている。⁽¹⁷⁾

次に、楚簡B本の文体分析に移ろう。始めに、C本と同様の作業をする。(図3参照)

B本の文体は、これは極めて明瞭な傾向を示す。一組のD₂は、二組のD₂に対応する。二組と三組はほぼ完全な相似形をなす。二組のA₃、二の否定「は帛書ではD₁の直前にあり、D層と関係が深い。B本は、C本とは全く別の動きを見せ、B₂「長生保身」↓D₂「負の

〔図3〕B本の文体分析



観念」↓(A₃・二の否定) ↓C層外縁という動きを繰り返す。これは、帛書において、B層とD層が合流して、C層が生まれたことに一致する。そして、文体C層でB本が終止するのも示唆的である。次に、A本の文体分析に移る。(図4参照)

A本では一応、二の否定(五組) ↓聖人の無為(七組) ↓反智(四組) ↓非戦(六組)の方向性が窺われる。或いは、文体Aより文体Cが発生するメカニズムを象徴的に表現しようとしたものであろうか。

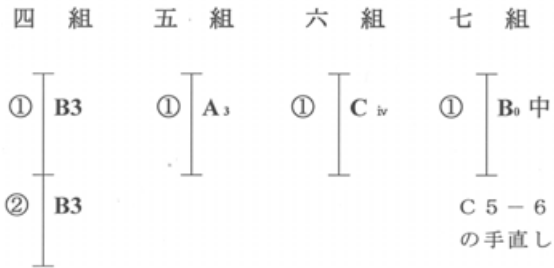
さて、楚簡『老子』ABC各本の文体分析を終えて、次にはABC各本間の相互の関連性を問うべき時に来た。まず、帛書『老子』にならって、各文体の出現頻度を表示しよう。

	文体A	文体B	文体D	文体C
(楚簡C)	8	9	1	2
(楚簡B)	0	3	4	2
(楚簡A)	1	3	0	1

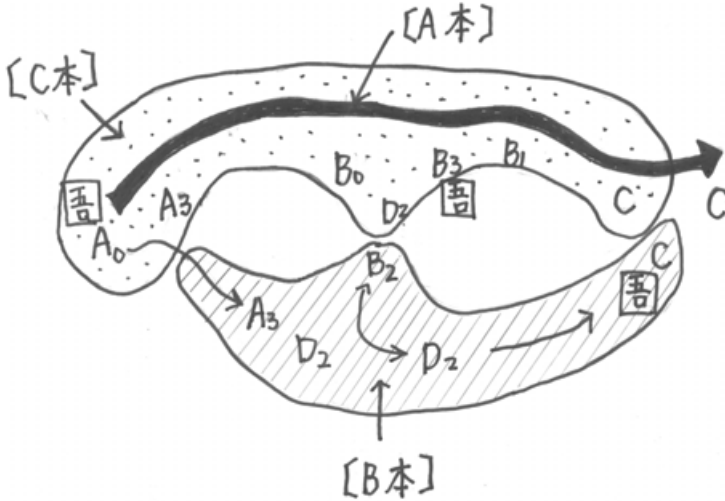
楚簡C本は文体ABが中心で、そしてDとCが若干顔を見せている。楚簡B本は文体BDCにわたって位置し、楚簡A本は傾向が弱いが、文体Bを中心に、文体ACが寄りそう。これらをすべて勘案して、私は、結局楚簡『老子』ABC本は、文体において、左図のような相関関係にあるものと理解する。(図5参照)

先ずC本において、A₀ A₃ B₀ B₁ Cを主軸とする精神の動きがあり、それを補完する形で(伏流として)B本のB₂ D₂

〔図4〕A本の文体分析



〔図5〕楚簡ABC本の相関関係



Cの動きが起こり、両者はC層において合流する。A本は、C本の主軸の上をもつ一度なぞった形となっている。そしてこの図の示す所は、私の前論文における次の結論に完全に合致している。文体Aは混沌であった。その中から文体Bが生み出された。Bは知であった。Bが地歩を固めつつあった時、情の力学が働いて、文体Dが生まれた。Dは情であった。かくて情と知との不安定な分離の後、両者は文体Cに於いて合一した。Aはより高度な次元で再統一され、その時幾つかの言語の美が生まれた。(以下略、前論文四二頁)

楚簡ABC本は、この私の結論の傍線を引いた部分の直前で、テキストを終えている。傍線部で私が述べたことは、帛書『老子』を待つて、始めて実現されたと考えるべきであろう。

以上、楚簡『老子』の文体分析によって、「老子」の成立事情を推測してみたが、まだ重要な問題で言い落としているものが幾つかある。それらは次章において、帛書『老子』と関連づけて考察したい。

第四章 楚簡『老子』から帛書『老子』へ「吾」のなぞらえということ

楚簡『老子』から帛書『老子』までへは、推定で約百年の時の経過がある。既に述べたように、その間に「老子」は大きく変貌を遂げた。ここでは、我々の目から見た楚簡『老子』と帛書『老子』の相違点、および両者の間に存在する継続性について考察することにする。

帛書について、前論文で私は、「確かな言語感覚を持った編纂者の存在は肯定しなければならぬ」と述べた(四二頁)。編纂者ということ念頭に置くときに、私はまず楚簡『老子』と帛書『老子』における一人称「吾」「我」の存在に留意したい。帛書の「吾(我)」について、私は前論文でまた次のように述べている(三〇頁)。

「老子」の「吾」と「我」の用法について私見を述べておく。所有格は「吾」、目的格は「我」が使われ、主格は双方が使われる。主格の「吾」は地の文で用いられる一人称(即ち「作者」)であり、主格の「我」は直接話法の中で用いられる一人称(独白を含む)。必ずしも「作者」とは限らない(18)である。

以上のことは帛書第二十章の文体D(独白)の分析を行う過程で述べた(前論文三十頁)ので、ここで、第二十章帛書校定本を再度採録する。楚簡には相当する箇所が無い。(前半部は別途引いたので略す)

衆人熙熙、若饗於太牢、而春登台、我泊焉未兆、若嬰兒未咳、畧兮、若無所歸、衆人皆有余、我独遺、我愚人之心也、
 慧慧兮、俗人昭昭、我独若昏兮、俗人察察、我独悶悶兮、忽兮、其若海、恍兮、若無所止、衆人皆有以、我独頑以鄙、
 吾欲独異於人、而貴食母、

(第二十章)

(多くの人は言々として、まるで「馳走の持てなしを受けて、春に台に登るような様である。私は身じろがず、まだ外に向かつて

現れませず、まるでまだ笑いもせぬ赤子のようだ。憂鬱で、帰る所も無いようだ。多くの人々は皆、有り余る程ものが有るのに、私独り失ってしまった。私の愚かな心は千々に乱れる。俗人たちは明晰なのに、私独り真つ暗なようだ。俗人達は颯爽としているのに、私独り悶々としている。暗く霞んでいて、海のようにであり、止まる所とて無いようだ。多くの人々は、皆取り柄があるのに、私独り頑固な田舎者である。私はたとえ独り人と異なるうとも、万物の養いの母を貰んでゆきたい。(

ここは、独白部分なので、一人称は「我」が用いられている。同じ一人称主格としての「我」は第五十七章(C43)や、第十七章(A41)にも見られるが、どちらも直接話法「曰」を受けた一人称である。

今回、私は本論を書き進める中で、帛書二十章を再点検してみて、前論文で一箇所大きな誤りを犯していたのに気がついた。それは、右引用文の最後の方の、「我欲独異於人」の「我」という読みで、これは今、写真版を見るに、甲本・乙本とも明らかに「吾」の字であると確認できる。今となつては、私の誤りが、どこに起因しているのか、自ら定かでない。推測するに、独白の一人称「我」という強い思いこみが私の眼を曇らせたのである。今、ここに訂正しておくなければならない。右引用文では、傍線を付し、既に訂正しておいた。(ちなみに、現行諸本はこの「吾」をすべて「我」としている)ただし、この箇所を訂正した後も、私の一人称主格の「吾」と「我」の区別についての見解は変わらない。従って、第二十章の「我」の独白は、「我独頑以鄙」で終わり、末尾の「吾欲独異於人、而貴食母」は地の文として読むべきである、ということになる。二十章の独白者「我」は、深い絶望の底に在り、決して何かを意欲したり、貰んだりはしないのだ。独白を終えた上で、その絶望の底から何とかは上げろと意欲するのが「吾」である。

一体に、二十章の独白は、『詩経』からの影響が多く窺われる。例えば、いま対象を「小雅・節南山之什」の「十月之交」にしぼって見てみるに、帛書甲本に「(我独頑)以慳」とあるのに対して、「悠悠我里」がある。『爾雅・釈詁下』に「慳、

憂也」、郭璞の注に「詩曰、悠悠我惺」と見える。また、帛書「衆人皆有余、我独遺」に対して「四方有羨、我独居憂」がある。毛伝に「羨、余也」。更に、帛書の「俗人察察、我独悶悶兮」に対して「民莫不逸、我独不敢休」を挙げることができよう。「独白」の「我」は、『詩経』の「我」と言ってもよいかも知れない。それは恐らく、ひたすら自分自身に向かつてのみ語りかける、孤絶した一人称であつたのだろう。二十章末尾で、一人称が「我」から「吾」に変わつて来たことについては、重要な意味が隠されているように思われる。

さて、帛書二十章では「吾欲独異於人」に続いて「貴食母」と見える。「母」は帛書はもちろん、楚簡『老子』で既に重要な意味を与えられていた語である。楚簡ではつぎの二例を見出すことができる。

莫知其恒、可以有域、有域之母、可以長久、是謂深根固抵、長生久視之道也、
(B2-1 五十九章)

現行本「恒」を「極」に作る(帛書は不明)。帛書「域」を「國」に作る。「恒」はここでは「境」の意。

有将蟲成、先天地生、斂綉独立不該、可以為天下母、未知其名、字之曰道、吾強為之名曰大、
(C1-1 二十五章)⁽²⁰⁾

右波線部の語義については確定を保留する。「該」は原字「亥」。「改」を当てる説もある。「該」ならば「兼ねる」意。C1-1は、A₀bからA₀cにかけての文体。ここで「母」が現れる。また、A₀c部で「吾」が現れている。帛書二十章の「吾欲独異於人、貴食母」は、B本の文体B₂「長生」を経由して、C本の核心にまで遡つていると言えよう。

右C1-1の例で明らかかな様に、楚簡『老子』の「吾」は「道」の名付け人であり、生みの親である。その意味では、「吾」は「渦中の人」ではなく、「見届け人、傍観者」というべきである。「吾」は楚簡『老子』では、この他に三例が認められる。

以亡事取天下、吾何以知其然也、……

(C4-3 五十七章) B₃「反智」

吾所以有大患者、為吾有身、及吾亡身、或何患之有、

(B2-4 十三章) C_{ii}「愛身」

吾何以知天 下之然哉 以此、

(B3-4 五十四章) C 独立体

このように、楚簡『老子』B、C本において既に傍観者の一人称「吾」が存在した。しかも、C1-1の文体A₀こという初期段階に「吾」が現れていることは、大いに注意すべきであろう。

「吾」は帛書『老子』になると大きく増えて、全体で十八例が認められる。(直接話法の「我」についてはいま考察の対象としない)これら一人称「吾」が如何なる文体に現れているかを、章次に従って左に列記してみよう。

道経

A₀ C_{ii} A₀^{*} B₃ D₁ (B) A₀ A₀ B₀ A₂

徳経

D₂ D₂ C_{iv} D₂ B₃ D₂ C D₁ C

傍線を付した部分は楚簡にも見える「吾」である。楚簡の一人称「吾」をなぞらせるようにして、帛書の「吾」が出現しているのが観察される。なぞらえは、既に見たように、「居以須復也」から「吾以觀其復也」へと、楚簡C本の最古層と推定されるC2(帛書十六章)において既に始まっていた(右図*印)。

その他、一人称では「吾将」()には一字の動詞が入る()という表現が注目される。楚簡『老子』と同時に「太一生水」と

いう竹簡一篇が出土したが、これより先に馬王堆三号漢墓（前漢・文帝期、前一七九〜前一五七）より、「太一將行図」が出土している。⁽²¹⁾ その図には、「太一將行 …… 神從之」との文字が認められる。「將行」は絶対者、「太一」の行為を指す。また、『楚辞』では、「吾將」は慣用的表現であり、屈原の代表作「離騷」の「歴吉日乎吾將行」や、「吾將從彭咸之所居」のように、詩の韻律（「離騷」の場合は、三言＋助字＋二言（兮）を破って現れる。⁽²²⁾ 『詩経』の「我」が四言の韻律に完全に組み込まれていたのに対して、『楚辞』の「吾」は、韻律に寄り添うようにして、いわば傍観者として詩に向かい合っている。これも屈原の作として伝わる「天問」には、長篇の最後の方に始めて一人称が顔を出す、ここでは、「吾」と「我」の違いがなされている。

悟過改更 過ちを悟りて 改更せば

我又何言 我 又 何をか言わんや

また、

吾告堵敖 吾 堵敖に告ぐるに

以不長 長からざるを以ってす

「堵敖」は王逸注に「楚の賢人也」、誰を指すかについては諸説がある。右の「我」は「詩経」的、独自の一人称であり、「吾」は語り手、話者としての一人称である。『楚辞』の他の一篇「招魂」には「帝告巫陽曰、有人在下、我欲輔之」とあって、直接話法の下でやはり「我」が使われている。

「吾將」は、本来、絶対者（神）の行為を指す語であったのだろう。⁽²³⁾ 『楚辞』の慣用表現としての用法は、恐らく、その名残りであろう。そして、この用法は「老子」にも引き継がれた。楚簡C3・1（三十七章）の「侯王……將鎮之以亡名之

樸」は、「侯王」という選ばれた人間のみが行い得る貴い行為を言う。楚簡ではこの箇所は直接一人称とは結びついていないが、帛書乙本になって、該当箇所は「吾將鎮之以無名之樸」となり、「侯王」が「吾」にすり替わってしまっている（甲本は不明）。「吾」が「侯王」（聖人）に乗り移ったのである。また、四十二章（楚簡は該当箇所無し）の帛書乙本に「吾將以為学父」とある。甲本は「我 以為学父」。七十四章（楚簡は該当箇所無し）帛書甲本に「吾將得而殺」、乙本は「吾得而殺之」。乙本は「將」が落ちたものと考えられる。「吾將」の定型意識が乙本に至って薄れてきた結果であろうか。私は、帛書の編纂者に、『楚辞』の「吾」意識に繋がる一人称意識が継承されていたのではないかと推測する。

帛書の「吾」は、やがて文体C層の中に自己の居場所を見つけてゆくが、このこと自体が既に楚簡の「吾」のなぞらえなのである。

楚簡『老子』でC本文体A₀に萌芽した「吾」は、以後、C本の文体B₃で一度姿を見せた以外は、C本・B本の中で抑圧されていたが、B本の外縁部・文体C層になって再び姿を見せる。「吾」にふさわしい居場所を見つけたと言つべきであろう。楚簡『老子』のうちで、文体C層に属するのは、つぎの四段落である。

C 5-4 (三十章) 文体C_v「非戦」

B 2-4 (十三章) 文体C_{ii}「愛身」

B 3-4 (五十四章) 文体C「独立体」

A 6 (三十一章) 文体C_v「非戦」

このうち、B本の2-4、3-4に一度ずつ「吾」が見える。次に、A 6（三十一章中下）を取り上げて、楚簡『老子』に芽生えたC層が帛書に向かってどう展開するのかを見てみよう。（○＝不明箇所）

君子居則貴左、用兵則貴右、故曰、兵者○○○○、○得已而用之、恬讐為上、弗美也、美之、是樂殺人、夫樂○○○、○○○以得志於天下、故吉事上左、喪事上右、是以偏將軍居左、上將軍居右、言以喪礼居○、○○○○、則以哀悲莅之、戰勝則以喪礼居之、(推定九十七字)

左に帛書の同文を引く。

夫兵者、不祥之器也、物或惡之、故有欲者弗居、君子居則貴左、用兵則貴右、故兵者、非君子之器也、兵者、不祥之器也、不得已而用之、恬讐為上、勿美也、若美之、是樂殺人也、夫樂殺人、不可得志於天下矣、是以吉事上左、喪事上右、是以偏將軍居左、而上將軍居右、言以喪礼居之也、殺人衆、以悲哀莅之、戰勝而以喪礼処之、(百二十五字)

(そもそも軍隊というものは、不吉な器(道具)である。誰もが常にこれを憎む。だから道を求めようとする者は、それに安住しようとはしない。君子が坐る時には左を貴ぶが、軍隊を用いる時には右を貴ぶ。だから軍隊は君子の器ではない。軍隊は不吉な器である。どうしても必要な時にのみ、これを用いる。平素は「静まりおののいている」のが最もよい。軍隊は美めてはならぬ。もしこれを美めれば、それは殺人を楽しむに等しい。殺人を楽しむようでは、天下において志を貴くことが出来ない。一般に言い事は左を尚び、喪の事は右を尚ぶ。それで、副將軍は左に居り、總大將は右に居る。それは、喪の礼に従って位置しているのである。人を多く殺すので、悲哀の情をもって戦いに臨む。戦いに勝っても、喪の礼に従ってこれに対処する。)

前論文で私は

「老子」の文体の最外縁に、我々は「悲哀」の語を得る。「老子」の終局を語る、象徴的な語である。(三六頁)

と述べたが、私の予測に反して、A6のこの段落は、おそらく楚簡ABC本の終局を語ってはいるものの、実際には、帛書『老子』の終局ではなくて、むしろその起点(出発点)であったのである。右の帛書は、前置きの部分と、文中の余分な縁

り返しが加わって、楚簡に比べて、ずいぶん冗長になっている。それらの付け加え以外に、さらに助辞「若」「也」「矣」「而」が付け加わり、「故」が「是以」となって、右文では、37%前後が助字で占められている。⁽²⁴⁾「吾」はあたかも、饒舌と助字のうちに自身を解消せんかの如くである。

楚簡『老子』の「吾」をなぞらえた帛書『老子』の「吾」は、楚簡『老子』三本に萌芽した文体C層をさらに延長し、そこに自己の実現の場を見出してゆく。その時より「民」の立場に近い、装い新たな「老子」即ち帛書『老子』が成立した。時折しも戦国末期、動乱の極に達した世のことと思われる。

結語

『史記・老子列伝』に老子子という楚の人が書十五篇を著して「道家の用」を語ったとあり、また、『漢書・藝文志』の「道家者流」の項には、他の『老子』の諸本に混じって『老子十六篇』が記されている。楚簡『老子』はABC三本の各組を合計すると十六組（十五組説もあり）になり、『史記・漢書』の記載と不思議にも一致する。前漢の時代、楚簡『老子』三本系のテキストが『老子』の名の下に、帛書系の『老子』とは別に、残存していた可能性もある。しかし、それも今の所は推測の域を出ない。それはともかく、楚簡ABC本はそれぞれに完結したテキストであり、この三本が合わさって、一小世界を形成している。そして、この小世界が、後世の帛書『老子』ないしは現行本『老子』の祖型であったと認めることができると思ふ。

注

- (1) 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書(壹)』文物出版社、北京、一九七四年九月。
- (2) 前掲書「編者説明」による。なお、甲本は小篆に近い字体で、乙本は隸書で書かれている。
- (3) 荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』文物出版社、一九九八年五月。
- (4) 前掲の二書に加えて、丁原植著『郭店竹簡老子釋析與研究』(萬卷樓圖書、台北、民国八十七年九月)、劉信芳著『荊門郭店竹簡老子解詁』(藝文印書館、台北、民国八十八年一月)、張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷 文字編』(藝文印書館、民国八十八年一月)、魏啓鵬著『楚簡《老子》東釋』(萬卷樓圖書、民国八十八年八月)、趙建偉『郭店竹簡《老子》校釋』(『本世紀出土思想文獻與中國古典哲學研究論文集(上冊)』輔仁大學出版社、台北新莊、民国八十八年四月、所収)等がある。
- (5) 注(3)に挙げた『郭店楚墓竹簡』では、三本を、古い順に甲・乙・丙本と名付けている。注(4)に挙げた注釈書も全てこれにならっている。従って、甲本=C本、乙本=B本、丙本=A本となるので、注意されたい。
- (6) 帛書『老子』乙本の「徳」経末尾に「三千卅(四十)一」、「道経」末尾に「二千四百廿六」と記されている。
- (7) Paulus Huang, "The Guodian Bamboo Slip Texts and the *Laotzi*", (中国出土資料学会『中国出土資料研究』3号、東京、一九九九年三月、四五頁)
- (8) 崔仁义氏の言葉を引く。「各組簡文、按文义编连成不可分割的整体；但各組之间的先后顺序，由整理者给定。因各册出土时编绳腐朽无存，原有顺序已不存在。」(崔氏前掲書四頁)
- (9) 「包山楚簡」は、一九八七年に湖北省荊門市包山二号墓より出土した戦国楚国の竹簡資料。墓主は前三一六年に埋葬された左尹の昭胤とされる。『文物』一九八八―五期所載の「荊門市包山楚墓楚簡報」および「包山二号墓竹簡概述」を参照のこと。

(10) 以下、本論で言う帛書校定本とは全て筆者自身の校定テキストを指す。その多くは一九七八年の前論文に載せたが、本論で初出のものも含む。なお、本稿における「老子」本文の訳は、帛書校定本にのみ付した。楚簡の本文に訳を付けなかったのは、ひとえに自身の準備不足に因る。読者諸氏には、煩瑣になって申し訳ないが、帛書の訳を読まれた後で、もう一度楚簡のテキストに戻って頂きたい。

(11) 「曰」は帛書の乙本にのみ有って、甲本には無い。

(12) 五二章訳「穴を塞ぎ、門を閉じれば、一生疲れない。穴を開き、事を為せば、一生救われない」

四十五章訳「真に完成したものは、欠点があるように見えるが、それを用いても壊れることが無い。真に満ちているものは、がらんとしたものであるが、それを用いても尽きることが無い。真に真っ直ぐなものは、曲がっているようであり、真の巧みさは、拙く見え、真に伸びたものは、縮まって見える」

(13) 三十七章訳「道は恒に無名である。侯王がもしこれを能く守れば、万物は自ずから教化されよう。教化されてその上さらに変を起さずとすれば、私ならば、これを『無名の樸』を用いて鎮めるであろう。『無名の樸』を用いてこれを鎮めるので、彼らは逆らうことがない。逆らわずに静まれば、天地は自ずと正しい姿を取るであろう」

三十二章訳「道はいつも無名である。(それは無名の樸に喩えられる) 樸は小さいけれども、天下の誰も自ら進んでこれを臣下にしようとはしない。侯王がもしこの樸を守ることができれば、万物は自ずから帰順して来るであろう。(中略) 止めることを知らねばならぬ。止めることを知れば、危ういことがなくなる」

(14) 六十六章訳「それで、聖人が民衆よりも上位に就こうとするならば、必ず彼らに対して言葉づかいを丁寧にする。もし民衆よりも先んじようとするならば、必ず、彼らの後に身を置く。だから、前に居ても民衆は邪魔者扱いはし、上に居ても民衆は重く見ない」

- (15) 六十三章訳「何もしないようにする。何事も起こさずにいる。味の無いものを味わう。小を大とし、少を多とする。怨みに報いるの徳を以てする。難しいことは、それが易しいうちに手を下し、大きいことは、それが小さいうちにしてしまふ。天下の困難は、易しいことから起こり、天下の大事は、小さな事から起こる。それで聖人は、最後まで尊大にはならない。だから偉大な事業を成し遂げることができる。軽々しく承諾するような者は、めったに信用できない。始めに易しすぎれば、必ず後で難しくなる。それで聖人は、易しいことに対してもこれを難しいものとして対処する。だから最後まで困難に遇うことがない」
- (16) 帛書では本来「知」と「智」の表記上の区別は無く、どちらも「知」で表されるが、私が、現行本を参照にした上で、これを区別して表記した。「知」は「人間の認識行為」を知る、「智」は「人間の経験の集積」智慧の意である。なお、楚簡『老子』も表記上は両者を区別しない。
- (17) 楚簡『老子』A・B・C本と、帛書『老子』の文体A・B・Cの表記法が重なってしまったので、読者諸氏は両者を混同されないように、注意されたい。
- (18) 「地の文」と「直接話法」の語義について、誤解のないように補足説明する。「地の文」における「吾」は、帛書『老子』では、「聞き手」「読者」に対して語りかける「吾」＝一人称である。他方、帛書『老子』の「我」は、「聞き手」「読者」からは独立して存在する一人称である。その意味で私は、「独白」の「我」と直接話法(曰)「……」でくくられる部分(中の「我」を同類のものに見なした。「独白」を、「吾曰」の内容と理解すれば、分かり易いかもしれない。
- (19) 帛書五十九章訳「その限界を知る者が居なければ、国を保つことができる。その上に、国の母を所有すれば、長く持続することができる。これを『根本を深く固める』と言ふ。これが、長く生き続ける道である」
- (20) 帛書二十五章の原文と訳を記す。原文「有物混成、先天地生、蕭兮寥兮、独立而不改、可以為天地母、吾未知其名也、字之曰道、吾

強為之名曰大、訳「何かある名状しがたいものが、混沌とした状態で存在した。それは天地に先立って生じた。もの寂しくがらんとしており、独りで存立して、変化することがない。これを天地の母とすることができる。私はまだその名を知らない。これに字して『道』と呼ぼう。私が強いてこれに名づければ、『大』ということだ」

(21) 「太一将行図」については、周世榮「馬王堆漢墓的《神祇圖》帛書」、『考古』一九九〇一〇、石川三佐男「出土資料から見た『楚辞』九歌の成立時期について」、『中國出土資料研究』創刊号、一九九七年三月（を参照した）。

(22) 拙稿「楚辞韻律論」、『同志社外国文学研究』第三二号、昭和五七年（二六頁〜二八頁参照）。

(23) 『論語・八佾』に「天将以夫子為木鐸」、帛書『老子』乙本卷前古佚書『経法・道経』に「過極失（当）、天将降殃」と見える。儒家系の書では「天」が「将」の主語に立っている。『楚辞』では「九歌・東皇太一」に「穆将愉兮上皇」、「離騷」に「巫咸将夕降兮」とあって、「神」自身ではなく、「神巫（神に扮した巫）」が「将」の主語に立つ。『鶡冠子・泰鴻第十』には「吾将告汝神明之極」（四部叢刊本）と見え、「吾」は「泰一（太一）」を指す。『鶡冠子』については、裘錫圭「中國出土簡帛古籍在文獻學上的重要意義」に次のように述べられている。「『鶡冠子』過去也被視為偽書、此書的簡帛本未發現、但馬王堆帛書《老子》乙本卷前古佚書中、有不見於他書而與《鶡冠子》相合的文句。從《鶡冠子》的內容看、此書應是戰國末年作品。」（『中國出土資料研究』第三号、一九九九年三月、五頁）

(24) 楚簡A6の方は、不明箇所が多くてあくまでも推定であるが、助字が占める比率は約24%である。なお、帛書『老子』の助字については、更に言及する必要があるが、本稿ではその余裕がなかった。後日の課題としたい。

（補注）校正の段階で、池田知久著「郭店楚簡老子研究」（東京大学文学部中国思想文化学研究室、一九九九年十一月）が刊行されたが、本稿では参考するに到らなかった。

郭店楚简《老子》与〈老子〉的原型（内容提要）

小池 一郎

1993年3月，楚简《老子》ABC 三本出土于荆门郭店楚墓中。楚简《老子》分为13组（A本3组，B本4组，C本6组）。其内容都见于帛书、今本《老子》，但内容分量只有帛书《老子》的三分之一，文字有很多改变，章次排列跟帛书、今本《老子》有差异。楚简《老子》的抄写年代，经推测为公元前300年左右，比帛书《老子》抄写年代要早一百多年。其文章有简洁、古朴的特点。

我曾在〈帛书老子文体考〉的小论（《中国文学报》29册，1978年）上分析过帛书《老子》的文体。我认为，帛书《老子》有四个文体，就是文体A（神秘体验），文体B（圣人的无为），文体D（B的伏流，独白）和文体C（外缘部）。帛书《老子》的初期阶段有文体A，然后文体B从文体A派生出来的。同时，伏流文体D发生，补足了文体B的内容。最后，文体B和文体D合在一起而出现了文体C。文体C含有《老子》对现实社会的批评和提案。

这次，我用这样的帛书《老子》文体分类方法来分析一下楚简《老子》的文体，而得到了很有意思的结果。楚简《老子》C本6组明显显示着一个趋向。C本的文体，从文体A出现以后，通过文体B才达到文体C的。与此相反，B本4组从文体B出发，通过文体D才达到文体C的。A本3组只是模仿C本6组的趋向罢了。这个分析结果完全符合我关于帛书《老子》文体的意见。我认为楚简《老子》ABC 三本已经形成一个小世界而这个小世界可以看做帛书、今本《老子》的原型。

楚简《老子》和帛书《老子》有什么关系呢？在楚简《老子》里我们可以看到四个第一人称“吾”。我想，帛书《老子》的第一人称“吾”（有十八个例子）是模仿楚简《老子》的“吾”而形成的。我们说，出现在帛书《老子》

郭店楚簡《老子》与《老子》的原型（内容提要）

中的“吾”是在吸收了楚簡《老子》思想内容的基础上发展起来的。而且可以说，帛书《老子》是一篇改头换面的楚簡《老子》。

The Guodian Chu Bamboo-scripts of the LAOZI
and the Original Form of the LAOZI

Ichiro KOIKE

Key words: Laozi, Guodian, Chu, bamboo-scripts, silk-scripts